

# 団地居住者の原風景に関する研究

## － 上尾市原市団地を事例として －



AK13093 松永 芙美

### Keywords

原風景 原風景試論 団地居住  
奥野健男 均質的空間 原市団地

## 1. はじめに

### 1.1 研究背景

自己を形成するもととなり、その人自身の創造力の源泉ともなりうる原風景。原風景という言葉が一般化した奥野健男の『文学における原風景』では、変化しない暮らしの中で繰り返され、染み付いた深層意識とも言うべき風景を原風景と捉えている。しかし、メディアや物語に「日本の原風景」として登場する青々とした水田や風情ある日本家屋は、実際にその空間を生活空間として体験していない世代の人々、特に都市や都市近郊の居住者にとっては「幻の原風景」であり、「嘘の原風景」なのではないだろうか。

本研究では均質的で画一的と考えられる都市近郊の居住空間を代表する団地居住を事例として、居住者に染み付き固着した原風景を研究していく。現代の都市またはその近郊に広がる均質的かつ画一的な住環境の中で、人々が抱く原風景にはどのようなものがあるのだろうか。

### 1.2 研究目的

本研究では、均質的で画一的な居住風景を持つと考えられる団地において、居住者の記憶に固着した原風景の実態を明らかにすることを第一の目的とする。既往研究で明らかになってきた原風景と比較し、居住環境の変容が原風景にもたらした変化を考察する。また、そうした原風景を基にして団地居住者が「居住地としての団地」に対して抱く感情の源泉を探ることを第二の目的とする。都市居住者は居住地への関心が弱いという一般論に対して、都市居住の一例である団地居住で生み出された原風景が愛着や執着など何らかの関心の源泉となるのではないかと仮説を立てて検証していく。

### 1.3 研究方法

2016年8月の約7日間、10月以降の補足調査期間に埼玉県上尾市の原市団地で調査を行い、団地居住者が抱く原風景についてヒアリング調査15件を実施した。原風景の定義を説明した上で、居住者が抱く原風景がどのような風景であるかヒアリングを行い、原風景の形成場所を地図にプロットしてもらった。

また、原市団地文化祭および原市カフェにおいて居住者が原風景と考える写真を募った。

## 2. 原風景に関する先行研究の検討

### 2.1 奥野健男 『文学における原風景』 1972年

それまでほとんど耳慣れない言葉であった「原風景」という言葉を大きく取り上げ、一般に流布させたのは、奥野健男の『文学における原風景』であった。奥野は原風景を自己形成空間のつくる心のイメージとし、都会育ちである自らの体験から「原っぱ」や「洞窟」が自身の心の深層にかかわるイメージであることを述べた。奥野によれば文学者の持つ原風景とその文学作品との間には対応関係があり、文学作品創造の源泉は原風景にあるという。また当時の現代小説作家たちの文学作品に見られる落ち着きのない孤独さ、やすらぎのない寂しさを問題視し、その後の地縁の喪失が生む文学作品の変質を危惧した。

### 2.2 関根康正 『原風景試論』 1982年

#### 『他者と対面する住まい』 1998年

上述の奥野の書に刺激を受け展開された諸論の中でも、生活空間との結びつきに重点をおいたのが、関根康正の『原風景試論』である。本研究では以下に示す関根の原風景の分類に基づき、原風景を捉えていく。

- ① 豊かな自然との交歓の表現
- ② 広々としながら遠景で縁取られた風景
- ③ 心に取り付く不思議、神秘、恐怖の場所
- ④ 日常の裂け目に刻まれる一片の風景
- ⑤ やすらぎの場所
- ⑥ あこがれとして想像される自然
- ⑦ 私という全存在の表現
- ⑧ 未来に向かって生きつづける風景

『他者と対面する住まい』では、原風景をより原理的に捉えなおしている。あかるくあたたかい空間で全的に受容された快感体験がその人の心の核をつくり、元手のアイデンティティとなること、さらにそれとは対称の位置にあるおそろしげな空間的暗部において他者との対面という境界状況に踏み込むことがより拡張した自分を獲得していくことに繋がると述べた。つまりあかるい空間と空間的暗部の存在が生き生きとした生の構築、さらにそれをもととした原風景の形成には必須であるとした。

## 2.3 原風景の定義

上述の先行研究をもとに、本研究では原風景を「変化しない暮らしの中で染み付き固着した風景」と定義し、この風景がもととなって「その後身を置きたいと考える場所の理想が創られる」と仮定する。

## 3. 調査の概要

### 3.1 上尾市の概要

上尾市は東京から35kmの距離にあり、埼玉県南東部に位置している。昭和33年の市制施行により上尾市が誕生した。地理的条件の良さに国の高度経済成長政策が加わり、ベッドタウンへと変貌を遂げてきた。大きく分けて上尾、平方、原市、大石、上平、大谷の6地区から成る。

表 1 上尾市概要

|     |                      |
|-----|----------------------|
| 面積  | 45.51km <sup>2</sup> |
| 総人口 | 228,092人 (2017年1月1日) |
| 世帯数 | 98,275世帯 (2017年1月1日) |

### 3.2 原市団地の概要

所在地：埼玉県上尾市3336

原市団地は埼玉県上尾市の南東に位置する住戸数1582戸の中低層集合住宅である。日本住宅公団（現在のUR都市再生機構）が事業主体となって計画された団地で、高度経済成長とともに昭和41年に入居が始まった。住宅公団によって計画された団地の多くがそうであるように、原市団地もまた東西に長い南面平行配置である。当初は、団地内および周辺には商店街が生まれ、大きなコミュニティを形成したが、現在は、世帯数の減少と住民の高齢化が進行しておりコミュニティの活性化が課題となっている。



図 1 原市団地詳細地図

平成23年度から芝浦工業大学との連携プロジェクトとして、原市団地内の一区画にサテライトラボ上尾と称する学外研究スペースが設けられ、団地居住者と企業、自



治体、大学生が交流する学びの場として活用されている。

写真 1 サテライトラボ上尾

### 3.3 調査対象者の概要

団地居住における原風景を調査するにあたって、本研究で主な対象としたのは、幼少期から原市団地に居住し日常生活を団地で過ごしてきた居住者である。比較資料として、団地入居開始後に原市団地外部から移住してきた70代から80代の居住者にもヒアリングを実施した。以下の図 2 調査協力者年齢内訳、図 3 調査協力者居住年数内訳に示すように、40代・50代、居住年数が20～50年の居住者を中心に調査した。

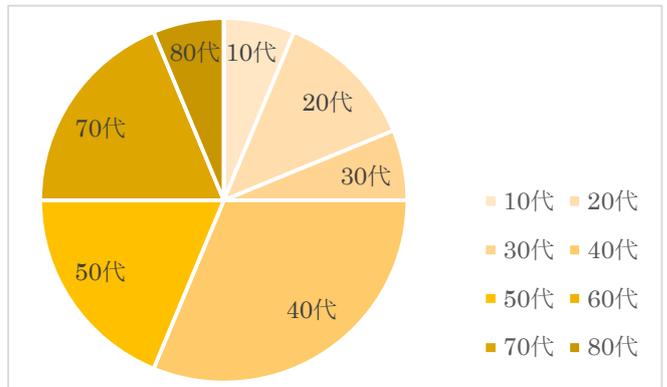


図 2 調査協力者年齢内訳

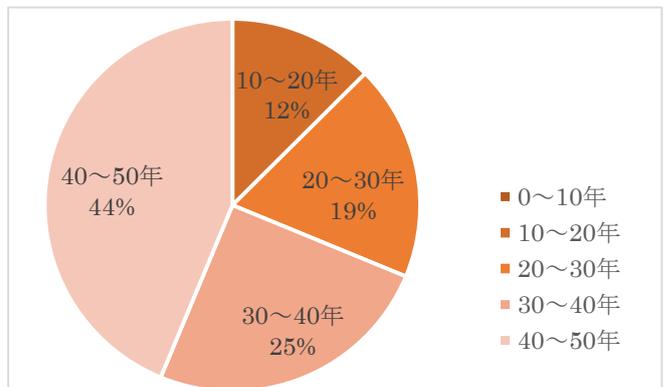


図 3 調査協力者居住年数内訳

#### 4. 団地居住者の原風景

団地居住者の語った原風景をテキストデータに直し、キーワードとなる頻出語をテキストマイニングソフトKH.Corderの「共起ネットワーク」ツールを用いて選出した。

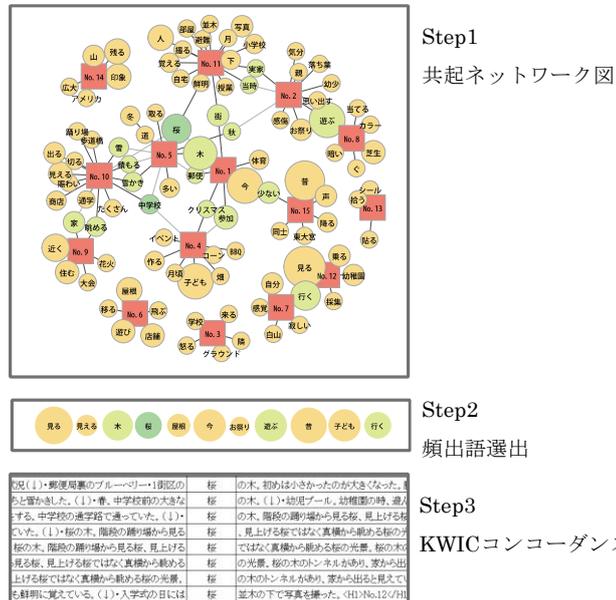


図 4 分析の流れ

選出した頻出語の前後の文脈から原風景の具体的な描写を探り、その特徴を明らかにした。ここで明らかになった特徴的な原風景を関根の原風景の分類①～⑧に基づき分類すると、以下のようになる。

- ① 豊かな自然との交歓の表現
  - ・樹木の成長を団地の風景の変化の基準として捉える。
  - ・以前の風景を懐かしく思い、切られてしまった木々を惜しむ気持ちを抱く。
  - ・日常的に緑と親しむ場所としての芝生があった。
  - ・公園でのあそびよりも、団地の建物や団地外の森林でのあそびが印象に残っている
  - ・30代から50代の居住者にとって、原市沼でのザリガニ釣り定番のあそびであった
- ② 広々としながら遠景で縁取られた風景
  - ・自宅から望む遠景
- ③ 心に取り付く不思議、神秘、恐怖の場所
  - ・「屋根」を使ったあそびは、スリルを体験できるあそびとして流行った
- ④ 日常の裂け目に刻まれる一片の風景
  - ・雷によって姿を変えた木や、雪の日のケヤキ、咲き誇る桜
- ⑤ やすらぎの場所
  - ・以前の活気があった生活風景
- ⑦ 私という全存在の表現
  - ・企画者として参与した夏祭りの光景

・団地居住者団結の象徴としての夏祭り

①～⑧の原風景のうち、⑥あこがれとして創造される自然、⑧未来に向かって生きつづける風景に該当する団地居住者の原風景はなかった。原市団地は国道や県道に近い一方で、近隣にはザリガニ釣りができる沼地や、どんぐり山と呼ばれる森林公園が存在し、幼少期より原市団地に住んできた居住者は、自然を身近に感じることができた。よって関根が考えた都市居住者が自然に対して抱くあこがれの念は生まれなかったといえる。団地居住者が自然を身近に感じ、親しんできたことは①の項目に該当する原風景が多いことから明らかである。関根によると⑧の未来に向かって生きつづける風景は、⑥がもとなりその人の心の中で描き続けられる風景であり、⑥に該当する原風景を持たない団地居住者にとって持ち得ないものであったと考えられる。

団地居住者の原風景として、特徴的ともいえるのが⑦に分類される原風景である。団地居住者がかかわり生きたさまざまな体験の集積や、無心に力を注いで参与した結果として心に刻み付けられた⑦の風景は、団地居住における原風景を特徴付ける重要な要素であるといえる。

「夏祭り」に全身全霊で参与し、団地居住者の一員としての誇り・シビックプライドが形成されたことが読み取れた。

#### 5. 原風景の生成場所

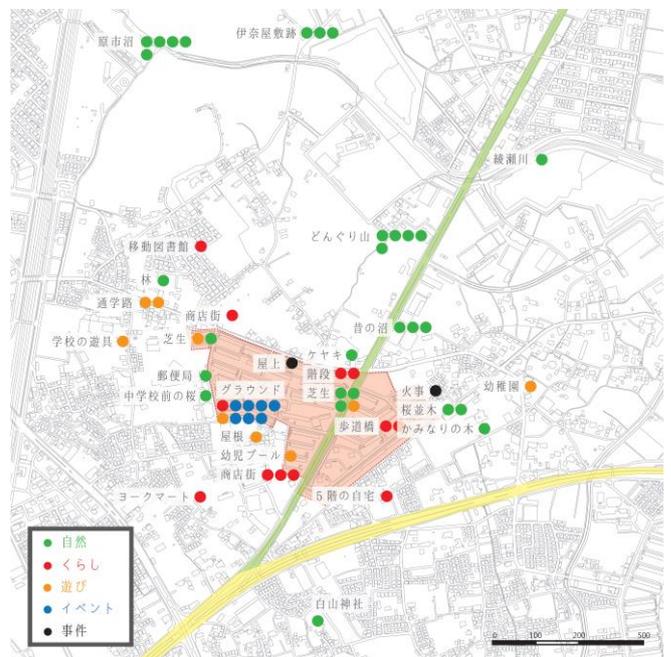


図 5 原風景の生成場所プロット図

原風景が生成された場所のプロット図を上を示した。団地内とその周辺のプロットの他、他県や国外へのプロットも見られた。団地中心より半径約1500m以内にプロットが多く見られ、居住者の原風景となりうるのはこの範囲内に集中していることがわかる。また国道や県道沿

いへのプロットは見られず、原市団地のくらしは郊外の均質的空間からある程度隔離されたものであったと推測できる。くらし、あそび、イベントに関するプロットは団地内に集中しているが、自然に関するプロットは団地から離れた原市沼や伊奈屋敷跡、どんぐり山にも見られ、団地居住者は団地周辺の一定の広がりをもった空間の中で自然を体験し、原風景を形成したといえる。

## 6. 理想の居住

表 2 現在の生活に対する理想・希望

| No. | 生活に対する理想・希望                 | 理由                                        |
|-----|-----------------------------|-------------------------------------------|
| 1   | 今のままでいい                     | -                                         |
| 2   | 今のままでいい                     | 緑があり、住みやすいと思う。落ち着き、安堵感を感じる。               |
| 3   | 定年まではこのまま住み続ける              | 住み慣れた場所だから。                               |
| 4   | 高齢者ばかりなので子どもがもっと増えるといい      | 多世代で盛り上がる以前の祭りが好きだったから。                   |
| 5   | -                           | -                                         |
| 6   | 今のままでいい                     | 親世代も団地内で家族が近くに住むことの快適さがあるから。              |
| 7   | 今のままでいい                     | 子どもにとって安心・安全の環境が整っているから。団地に対する執着や愛着があるから。 |
| 8   | 今のままでいい                     | 野球チームに入っていることで地域とのつながりをもてるから              |
| 9   | 団地内でリフォームされている部屋に移り住みたい     | きれいで住みやすいところに住みたい                         |
| 10  | 今のままでいい                     | 今の生活に不便さを感じていないから                         |
| 11  | -                           | -                                         |
| 12  | 現在は団地外に住んでいるがいずれ団地で一人暮らししたい | 知り合いも多く住みやすいと感じるから                        |
| 13  | -                           | -                                         |
| 14  | 海外で暮らしたいと思っていた              | 自然が豊富なところに住みたいと思っていたから                    |
| 15  | -                           | -                                         |

上に示した「現在の生活に対する理想・希望」について、調査対象者の半数以上が団地の生活のなかで体験し記憶に深く染み付いた自然や家族付き合い、近所づきあいの風景に愛着や安堵感、落ち着きを感じ、今後もそうした暮らしを継続していきたい、または以前の暮らしを理想とし活気や賑やかさを取り戻したいと考えていることが分かった。奥野や関根がまとめてきた内容と同じように、団地居住においても原風景や今まで体験してきた暮らしの風景や光景が染み付き、「その後身を置きたい」と考える場所の理想が創られる」ということがいえる。さらに、「住んでみたい場所」として団地居住ではあまり体験する機会のない豊かな自然や土地独自の文化・産業を持つ場所が複数上げられた。関根の述べた自然に対するあこがれは団地居住の原風景として描写されなかつ

たものの、土地独自の文化や産業に対するあこがれがあるのではないかと推測できる。

## 7. まとめ

原市団地における原風景は、団地居住という均質的で画一的な居住空間でありながらも、豊かな自然との交歓の風景や、やすらぎを得られる場所としての「団地」のくらしの風景、さらに自分の存在が意味あるものであることを確認しシビックプライドの源泉となった「夏祭り」の風景など、印象深く語られる風景が存在した。

理想の居住と原風景にも関連性があることが検証でき、「懐かしさ」や「郷愁」といった感覚を自身の出身地に対して持ち得ないにしても、心の奥底には愛着や執着の念を抱いていることが確認できた。

一方で原市団地の原風景には「家」に関する印象的な原風景が表れなかった。これは、住居内部から空間的暗部（他者との対面の間）が失われ、生き生きとした生の構築及び原風景の形成が困難になっていることが原因として考えられる。住居は今や、所有欲を満たすための資産や「休む」ための基地機能しか持ち得なくなっている。

今後の都市および都市郊外居住において、住居が意味を持ち続けるためにも、上述のような画一化・均質化の中心化傾向からの脱却をはかり、生き生きとした生の構築とそれをもとにした原風景形成の場となる必要がある。原風景の原理にみたように、「自己」と「他者」が対面する境界状況を意図的な工夫によって設け、創造性を喚起する「家」をつくりあげることが必須なのである。現代の都市居住における原風景の実態を把握することにより、多様化した居住スタイルにおける「本格的な他者」をさがすことは、住居が意味のあるものであり続け、人々が生き生きと自らを構築して行く場であるために必要不可欠であるといえる。

## 参考文献

- 1) 奥野建男『文学における原風景』、集英社、1972
- 2) 関根康正「原風景試論—原風景と生活空間の創造に関する一考察—」、『季刊人類学』p.164-193、1982年3月
- 3) 関根康正「他者と対面する住まい」、学芸出版社、1998年『住まいにいきる シリーズ建築人類学4』 p.229-248、佐藤浩司編
- 4) 『集合住宅計画研究史』、日本建築学会、1989年
- 5) 古谷経衡『「日本の原風景」の嘘 Real japan
- 6) 深町梢「団地における大学連携の意義と課題の研究」、修士論文、2015
- 7) 上尾市HP  
<http://www.city.ageo.lg.jp/>
- 8) UR賃貸住宅HP—原市団地—  
[http://www.ur-net.go.jp/akiya/saitama/50\\_1090.html](http://www.ur-net.go.jp/akiya/saitama/50_1090.html)